## 公益財団法人 日本交通公社 出版物のご案内

**■地域の〝とがった〟に学ぶ インバウンド推進のツボ②**

二〇一一年発行の『地域の〝とがった〟に学ぶ インバウンド推進のツボ』の続編。今回は主に資源の見つけ方や生かし方に関する〝とがった〟を中心に取り上げています。二〇一二年五月発行。

**■マーケット・インサイト 2012（日本人海外旅行市場の動向）最新刊**

日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。二〇一一年の最新市場動向をカバー。当財団の独自調査を基に、変化の下に働く中・長期的ダイナミズムを明らかにしています。日本語版、英語版あり。二〇一二年七月発行。

**■自主研究レポート2011／2012**

当財団が自主事業の一環として取り組んでいる自主研究の成果をまとめた論文集。観光を取り巻く領域はさらに広がり、多様な観点からの議論が行われています。そうした流れを反映し、温泉地の住民意識を通して今後の温泉地の在り方を探る研究や、観光地を訪れた観光客の「感情」や満足度の調査を競争力の高い観光地づくりにつなげる研究など、新しいアプローチを試みた研究も収録。併せて当財団が主催する研修事業（セミナー、シンポジウム等）や出版・広報の概要についても紹介。二〇一二年八月発行。

**■旅行者動向2012 最新刊**

最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自の切り口で分析、グラフや図表を多用して分かりやすく解説。二〇一二年十月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。
担当：公益財団法人日本交通公社 観光文化事業部
電話 03・5255・6073 http://www.jtb.or.jp

## 次号予告

●古来、宿屋は旅人と地域住民が同じ屋根の下で交流、会食ができる唯一の場として、文化の伝播や情報の拡散に大きな役割を果たしてきました。宿屋はその国、その地域の生活文化や接待文化を表現してきたことで、世界各国に発展し、今では文化観光の目的地ともなっています。次号特集では、近世から近代における宿屋の成立過程や、交流機能と文化表現の変遷を日本および外国の事例を通じて、今後のホテル・旅館の在り方を展望します。

## 当財団からのおしらせ

**「研究員コラムの紹介」**（二〇二一年二月～十一月）

行く先々で見て触れて、そして地元の人たちと語り、感じたこと。世相のなかに見た観光の未来像など、各研究員が独自の経験と視点を基にして、ホットな雑感をつづります。

当財団ホームページ「研究員コラム」に掲載した十カ月分をご紹介します。

160 マレーシアでの民泊体験を通じて考えたこと ――（菅野正洋）
161 心揺さぶるレストラン朝礼 ――（久保田美穂子）
162 「しあわせ」の感じ方 ――（黒須宏志）
163 財政統計からみた地域の観光財源の課題 ――（塩谷英生）
164 宿から地域活性化を考える ――（高橋葉子）
165 「キャリング・キャパシティ」は算出できるのか（その6）――（寺崎竜雄）
166 つながる暮らし、はぐくむ未来 ――（中島泰）
167 パリ国際大学都市を訪れて ――（中野文彦）
168 風景を生きたまま残すということ ――（堀木美告）
169 観光も「自己責任」の時代へ ――（牧野博明）
170 「成功施設」では地域を救えない ――（山田雄一）
171 物語を活用した研修にチャレンジ ――（吉澤清良）
172 観光の未来をつくる図書館 ――（渡邉智彦）
173 「あるべき姿」を考える際の視点 ――（安達寛朗）
174 ソーシャルメディア時代の到来 ――（相澤美穂子）
175 「観光特急」「観光列車」で列車の旅の魅力アップ ――（有馬義治）
176 先進事例を「物語」で学ぶ ――（岩崎比奈子）
177 「前田正名」という人 ――（梅川智也）
178 自然と人に癒される道～済州オルレを歩いて ――（大隅一志）
179 多文化に触れ、グローバルを養う「旅の力」 ――（岡田美奈子）
180 タブレット端末の威力
～小さな子どもたちも動画サイトを見る時代に ――（川口明子）

当財団ホームページURL http://www.jtb.or.jp/

## 編集後記

◆観光地が持続するとはどういうことでしょうか。持続可能な状態になっているかどうかを知る方法があるのでしょうか。日本各地で観光とまちづくりとを結び付けて地域の活性化を考え、末永く続くモデルを模索しています。

◆今号で取り上げた特集企画は当財団観光調査部からの提案となっています。科学的な方法で持続可能な観光、観光地を目指すために、「指標」「モニタリング」というツール（道具）を活用する方法を紹介しています。中島・清水両研究員が世界観光機関（UNWTO）の指標について紹介し、日本国内での適用に向けての展望を試みました。指標の方法論で研究、実践活動されているイギリス・サリー大学のミラー教授から巻頭言と特集にご寄稿いただき、英文原稿と和文参考訳を併載しました。海外事例のほか、日本での指標導入の際の留意点などの提示をいただきました。

◆特集テーマからの視座で寺崎がいうように、観光地の住民が「心安らかな暮らしを持続する」ことを観光地づくりの根本に据えることが大切であると再認識しました。

◆「自主研究報告」では、住民の意識調査で得られた「数値」を基に地域住民と観光の関係について福永研究員が研究の一端を紹介しました。客観的なデータをベースに観光地づくりを考える一例になっていて、特集テーマに通じるものがあります。

◆編集方針を変えての二号目の内容はいかがでしたか。当財団の活動を知っていただける誌面づくりを目指します。（片桐）

観光文化編集室メールアドレス：kankoubunka@jtb.or.jp

観光文化216号やバックナンバーをPDFで閲覧できます。
URL：http://www.jtb.or.jp/publishing/index.php?content_id=5